

◎生産履歴を正しく記載して消費者に安心を届けよう。

◎圃場外への飛散(ドリフト)に注意しましょう。

◎農薬使用の前にはラベルをよく確認して農薬使用基準を厳守すること。

◎土づくりに努め、効率的な施肥管理を心がけましょう。

重点目標		1. 計画栽培による長期安定出荷に努めよう。 2. 堆肥の施用・深耕・高畦等の土づくりや適期収穫で品質の向上を図ろう。																							
作型	品種	8月		9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月			
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
秋どり	サーマルスター、サウザー	○	○	△	△																				
年内どり	ラトル、早生サリナス、オーウェン、プロディ	○	○	△	△																				
冬どり	アスレ、Jプレス、シスコピバ、サウザー、レスコフ、モダナ																								
春どり(トンネル)	プロディ、早生サリナス、シスコピバ、サウザー																								
春どり	サウザー、マイヤー、オーウェン																								
		○ 播種 △ 定植 ◡ トンネル ▨ 収穫期																							
栽培管理		作 業 の ポ イ ン ト																							
育 苗	種子の準備	・ 植え付け株数は、10a当り概ね6,600~7,400株であるため、コート種子を10a当たり7,000~7,600粒程度準備する。																							
	セルトレイ	・ 200穴のセルトレイを使用する。10a当たりのセルトレイ必要枚数は、35~38枚である。																							
	播種準備	・ ビートモス、パーミキュライトを主体とした与作N150または与作N100を用いる。																							
	播種	・ セルトレイに培土を均一に充填し、播種前に培土が均一に湿る程度にかん水する。播種穴を鎮圧機(板)を用いて均一に開ける。穴の深さは3mm程度とする。																							
苗 管 理	育苗箱	・ 専用の播種機等を用い、1セルに1粒ずつ播種し、種子や培土が流れないように静かにかん水する。高温による発芽障害を防ぐため、育苗箱を不織布などで覆い倉庫などに置き、遮光や通風に努める。																							
	育苗管理	・ 発芽後は徒長を防ぐため、速やかに不織布等を除去し、明るい場所に広げる。セルトレイは金網や水稲育苗箱などの上に置き地面から離す。かん水は天候にあわせて1日数回行い、徒長防止のため主に午前中に行い夕方には培土表面が乾く状態になるようにする。葉色が薄くなってきたら播種後15日目頃から液肥を使用する。																							
	台風対策	・ 低温期の温度管理は育苗前期は15~21℃の適温管理になるようにする。定植の5~7日前には外気温に近づけ馴化を行う。																							
	べと病対策	・ 苗床に寒冷紗をトンネル型に被覆固定する。																							
定 植	定植準備	・ 基肥は定植10日前までに全層施用する。畦立ては土壌条件の良い時に実施し、高畦とする。																							
	定植	・ 地温の調整、土壌水分の保持、雑草の発生防止等のため、黒マルチを用いる。																							
	畦幅・株間	・ 斑点細菌病の予防のため、オリゼート粒剤(6~9kg/10a)を土壌混和しておく。																							
管 理	かん水	・ 外葉形成期の乾燥は小玉のまま球が硬くなり、品質の良いものができないため、乾燥が続いたときは、畦間の半分程度の深さにかん水し1時間後に落水する。																							
	病害虫防除	・ 結球期までの初期防除の徹底を図る。トンネル栽培ではトンネル内に病害虫を持ち込まないため、トンネル被覆前に防除を徹底する。																							
	トンネル管理	・ 12月どりで、凍霜害を受けることがあるので、保温と防霜を兼ねて不織布をべたがけする。																							
収 穫	収穫	・ 8分結球すれば外葉2~3枚をつけて収穫する。																							
	施肥	土壌診断を行い、pH6.5~7.0を目標とする。																							
肥 料	土基づくり肥	秋どり・年内どり				冬どり				春どり															
		肥料名	施用量(kg/10a)	N	P ₂ O ₅	施用量(kg/10a)	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施用量(kg/10a)	N	P ₂ O ₅	K ₂ O	施用量(kg/10a)	N	P ₂ O ₅	K ₂ O								
		堆肥	2,000			3,000				2,000															
		苦土石灰(またはホワイトM30)	100(80)			100(80)				100(80)															
	レタス配合	120~160	13.2~17.6	10.8~14.4	12.0~16.0	240	26.4	21.6	24.0	120	13.2	10.8	12.0												
備考	秋どりはN成分量13kg/10a程度が望ましい。												前作がある場合は減量する。												
病 害 防 除	アブラムシ類	薬剤	RAC	対象	濃度等	使用液量	使用時期	使用回数	使用方法等	備考															
		ダイアジン粒剤5	1B	77	6	400倍	セル成型育苗トレイ1箱当たり0.5ℓ	1	定植時	土壌表面散布															
		ベリマークSC								1	灌水														
		プレバソンフロアブル5	28		100倍	セル成型育苗トレイ1箱当たり0.5ℓ	育苗期後半~定植当日	1	灌水																
ビッグベイン病	フロンスайд粉剤	29		30kg/10a	100~200ℓ/10a	播種又は定植前	1	全面土壌混和	レタスビッグベイン病の蔓延防止対策 (1) ビッグベイン病の症状は、葉脈付近が退緑化し、葉脈(vein)が大きく(big)見える。重症になると株が小さく、結球しない。 (2) オルビディウム菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病。 (3) 発病圃場の土が伝染源となる。排水不良が発生を助長する。 (4) 感染適温は、15~20℃とやや低温を好む。症状は20℃以下で明瞭に発現する。 (5) 高pHを好み、pH7.0以上で発病しやすい。 (6) 発病圃場では、レタスを連作しない(10年間ウィルスが生存していた事例がある)。 (7) トンネル被覆を早めに行なって地温の確保に努める。 (8) 発病株残渣や土を発生圃場から持ち出さない(靴やトラクター等に付着した土にも注意する)。 (9) 耐病性品種と薬剤処理で対処する。 (10) 付作前にフロンスайдSCを土壌混和する。 (11) オルビディウム菌が根から侵入するのを防ぐために、定植時に薬剤(ダコニール1000、トップジンM水和剤、アミスター20フロアブル)を土壌灌水する。																
	フロンスайдSC							全面土壌混和																	
	トップジンM水和剤	1		1,500倍	1.5ℓ/㎡	定植前	1	全面土壌混和																	
	ダコニール1000	M5		1,000倍	1.5~3ℓ/㎡	100~200ℓ/10a	定植前	2		全面土壌混和															

FRAC (低抗性リスク)	1	MBC殺菌剤	高	2	ジカルボキシミド類	中~高	4	PA殺菌剤	高	7	SDHI	中~高	11	QoI殺菌剤	高	14	AH殺菌剤、ロフロフェニル類、ニトロアニリン	低~中
	24	カスガイシン	低	29	フルアジナミ	不明	31	カルボベンゼン	不明	40	CAA殺菌剤	低~中	M1	無機化合物	高	M5	クロロニトリル	低
IRAC	15	有機リン系	低	4A	ネオニコチノイド系	中	4B	ネオニコチノイド系	中	4C	スルホキシミン系	中	5	スピロシミン系	中	6	アベルメクタン系、ミルベマジン系	中
	13	クロフェナピル、DNOC、スルファミド	低	14	ネライストキシン類	中	15	ペンシリン酸系	中	18	ジアシル-ヒドラン系	中	23	スピロテトラマト	中	28	ジアミド系	中
	30	フルキサメタミド、プロフリナリド	UN															

防除等の情報
病害虫の発生状況、発生予報、防除方法等をお知らせしています。
◆徳島県病害虫防除所 <http://www.pref.tokushima.jp/taffsc/t-boujousho/>

JA グループ
JA | 全農とくしま

農業登録内容は2022年6月21日現在のものです。

(2022年8月1,065枚作成)